

---

# 過去に囚われた私

森崎優嘉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過去に囚われた私

### 【コード】

N9915U

### 【作者名】

森崎優嘉

### 【あらすじ】

11年前、あの悲劇が起こった  
そして悲劇が過去の事になったとき再び、幸せだった時間が滅ぼう  
としていた。

過去の悲劇を再び思い出してしまったりイナ、そして自分の正体を  
知った。

神人の姫、神人の先代弟王の子孫である兄弟、そして先代神人の王  
専属侍女の子孫。この四人の秘密。そして四人の繋がりが途切れて  
千年、今、再び繋がろうとしていた。

## 始まり（前書き）

もう一つの小説と掛け持ちなのであまり更新できないとおもいますがよろしく願います。

## 始まり

私が2歳の時、それは起きた

魔物の群が村に押し寄せてきた。

私のお父さんとお母さんは、私を守るう必死に魔物と戦った。だが、最後は2人とも私の目の前で死んだ。

私は隣に住むお兄さんに助けられた。おかげでこうして今も生きている。

村は一夜で消えた。生き残ったのは私と助けてくれたお兄さん、お兄さんの弟、お兄さんのお友達の人、この4人だけだった。

今は私と、助かった3人と一緒に住んでいる。

私の名前はリイナ・アルテミス、歳は13歳。助けてくれたお兄さんの名前はリクト・ルイロスさんそしてリクトさんの弟で私と同じ年のカイル、そしてリクトさんのお友達のセフィーナ・カリウスさん。

みんなあの事件で両親を亡くしたの…  
でも今はみんな協力して楽しく暮らしています！

「リイナ、急に笑い出して…どうした」

「ふふwwちよつとした思い出し笑いだよカイル」

「思い出し笑い…ねえ…それと、やけに人がこっちを見ているけど…なんで？」

「それはきつとカイルがイケメンだからだよ！」

カイルはすごくカッコ良い人なの！学校でも学年関係なく人気者なのです。お兄さんのリクトさんが並ぶとイケメン兄弟でこれもまたすごい人気なの！

セフィーナさんもすごく綺麗な人で毎日ラブレターを貰っている  
です。

私も一応ラブレターを貰っているのですが、いつも燃やしているか  
切っているかで中身を見たことはありません。

こんな幸せな時がずっと続いてほしいのに……あの嫌な記憶を再び思  
い出させるまでの時間は長くはなかった。

## 始まり（後書き）

誤字・脱字などがありましたらお知らせください。

再び思い出してしまった記憶（前書き）

そろっと暗いお話...

## 再び思い出してしまった記憶

私はお母さんもお父さんも2人とも大好きだった。

2人は村の医者だった、よく2人から薬草のことなどを教えてもらった。

忙しいときは1日帰ってこない時があったけど仕方のないことだつて分かった。

けれども、そんなお母さんとお父さんのことが大好きだった。

今日も青空の天気だった。私が起きるとセフィーナさんが朝食の準備をしていた。

「おはようございますセフィーナさん」

「おはようリイナ、あと、『さん』は駄目って言ったでしょ？」

「ううゝ…ごめんなさいセフィーナ…」

私が訂正して言うのとセフィーナさ…セフィーナは準備を続けた。

私もお手伝いをしているとリクトさんとカイルが起きてきた。

「おはようございますリクトさん、カイル」

「少し遅いわよ2人とも」

「すまんスマン」

「ううゝ眠い」

カイルはまだ眠そうに目をこすっていた。私はそんなカイルに少し笑ってしまった。

「何笑ってるの？」

つい声を出してしまったのかカイルが聞いてきた。

「ふふwwカイル可愛いなゝって思っただけ」

「！僕は可愛くない！！」

「ふふww」

カイルが怒ったところも可愛いな、て思ってしまった。

「はいはい、2人ともご飯の準備ができたわよ」

「はい」

そして私とカイルは椅子に座った。

そしてこの後、リイナに悲劇が襲うことをこの時4人は思いもしなかった。

『ギギ…ギ…ガガグガ』

「うわあああああ！！」

「魔物が出たぞー！！」

「逃げろー！！」

「きゃあああああ！！」

私は『魔物』という言葉に大きな違和感を感じていた。

「魔物！？早く逃げないとよ！リクト！」

ま…も…の…まもの？…マモノ？…魔物！？

「ああ、早く騎士様が来ればいいんだが…」

「…どうした？リイナ…おいリイナ？」

「…魔物…あ…い、や…」

「リイナ!? しかつりしろ!」

体の震えが止まらない、思い出すのはあの時の記憶。

私のために守ってくれた両親、最後は首が…

「あ、い…や…いやあああああああ!」

「リイナ!」

リクトは崩れるように座るリイナを抱きとめた。

「嫌だ! いや…だよう…お母さん!」

「落ち着いてリイナ、大丈夫だから」

カイルはずっとリイナの背中をさすっていた。

「騎士様! 向こうです! 向こうに魔物があります!」

セフィーナは到着した騎士に魔物の居場所を教えていた。

『魔物』という言葉に再び震えだしたリイナにリクトは少し強く抱きしめた。

「…嫌だよ、お父さん、お母さん…なんで! 首、いやだ!」

リイナは時間が経つとともに蘇る記憶に我慢をしていた。

やがて魔物も騎士によって倒され、元通りになっていく。そんな中リイナたちは公園のベンチに座ってリイナが落ち着くのを待っていた。

「はあ、はあ、はあ…」

荒い呼吸にセフィーナは心配していたがだんだん呼吸が柔らかくなると安心して公園のブランコに座っていた。

「落ち着いた?」

「うん…心配かけてごめんねみんな」

「ううん、大丈夫だよ」

「ええ! 私だって! 心配したのよ?」

「……」

リイナはずつと黙っているカイルが心配になった。

「大丈夫カイル？」

「ん？ああ、大丈夫だよ。そっちこそもう大丈夫なの？」

「うん…ただ昔の事を思い出しちゃっただけだから」

私のその言葉にみんなが沈黙した。

11年前の悲劇。

あの悲劇は私たちにとって絶対思い出したくない記憶だった。

再び思い出してしまった記憶（後書き）

次回は残酷かもしれません。

誤字・脱字があったらお知らせください。

## 過去の悲劇（前書き）

今回は少し残酷かもしれません。

## 過去の悲劇

私はある小さな村にお父さんとお母さんと3人で暮らしていた。お父さんとお母さんは村の医者で結構有名だった。だからよく、遠い町からもお父さんとお母さんに診てもらうために来る人もいた。遠い町で来るのが難しい人がいたらお父さんお母さんは自ら町まで行くときも会った。そうになると村に医者がいなくなる、そういう時はお父さんとお母さんのお弟子さんが村に残る。私はお母さん達に会えないのは寂しいけど仕方ないことだって分かっていたし、隣に住んでいる幼馴染のカイルとカイルのお兄さんとよく遊んでいたから私は毎日が楽しかった。

でも、そんな幸せで楽しい時間はあの日の夜の悲劇ですべて消えた。

その時、私は胸騒ぎがした。何かとてつもなく嫌な予感がした。そう思った瞬間なにか嫌な視線を感じた。

「お母さん！何かが私たちのこと見てるよ！！」

「大丈夫よリイナ、ここにはお母さんもいるしお父さんもいる、私達の弟子もいるし村の皆がいるわ、怖くなんかないわ」

「でも、でも！」

ずっと私は分かっていた。何か私達をいしそに見ているって…。

「リイナはやはり普通の子とは違って殺気を感じるのが鋭いな、やはりリイナには神人の血があるな…」  
「かみびと」  
最初私には、お父さんが言っていた神人というのが分からなかった。

だんだん何か村に近づいてきた。

村では多くの男の人が武器をもつて私達を守っていた。

私はまだ怖くてずっとお母さんに抱きついていた。

「…ごめんリイナ、まだあなたは2歳だというのに…私の血を濃く遺伝してしまった所為であなたをこんな怖いことを体験させてしまった…きつと魔物たちの狙いはあなたよ、でも絶対あなたを守ってあげるわ…お父様の反対を押し切って人間のもとへ来たのだから」

「お母さん？」

「絶対守ってあげるから」

そう言ってお母さんは私を強く抱きしめた。

その瞬間だった。いきなり扉があいて何か家に入ってきた。

「魔物…やはりあなたたちの目的は私の娘だったのね」

「ギギ・我々の目的は神人の王、そして王の娘を殺すこと…ダ」

「…それならばなぜ関係のない人間を殺すの！？殺すのならば私を殺せばいいでしょう!？」

「ギガ…娘も…殺す…」

「この子は純血な神人ではないわ!!この子は何も関係ない!殺すのなら私を殺しなさい!」

「グガ…ならば王よ、貴様を殺す」

「お母さん!」

「リイナ、貴方は頭がいいから今の話を理解していると思うわ、だ

から今の話は誰にも話してはだめよ…やくそ…」

「お母さん!？」

魔物が何かを振り落とした瞬間、お母さんの首がなくなっていた。切れた首もとからは血が溢れてきた。その所為で私の服には血が沢山付いた。

「おかあ…さん?…どうして…お母さんを?」

「ギガ…さすが神人の血が流れているだけあって、冷静だな…」

「答えなさい、なんで私のお母さんは殺されなきゃいけなかったの?」

「…お前の母親は神人の王だからだ」

「神人?」

「そうだ、人間であって人間でない…神に近い存在、それが神人

…」

そこで私は神人かみびとというものを理解した。

「お前がすぐに理解ができる、その力も神人の力、後は段々と分かってくる…神人の王、お前の母親が残したお前の命、しっかり生きるよ」

「どうしてそんなこと言うの?あなたは誰?」

「俺は人間から魔王と呼ばれている…お前のように、俺は魔族の血もあるが人間の血もある…お前と同じようなものだ…さらばだ神人の姫君、リイナよ…また会うその時まで」

「うん、できればもう会いたくないけれど…私を生かしてくれてあげがとう魔王、しっかりお母さんの分も生きるよ」

魔王は最後にフツと笑ってから姿を消した。

それからリクトさんとカイル、そしてセフィーナが助けに来てくれた。

そして今に至る。

私達は魔物がいなくなったという騎士様からの連絡で無事、家に帰

ることができた。

「神人…ねえ…」

「？なんか言ったかリイナ」

「ううん、何にも言っていない」

「魔物怖かったわ」

「それにしても魔物なんて久々に見たいよ」

魔物…今回も魔王が命令したのかな？そう思いながら私は目を閉じた。

魔王なんかには会う機会なんてない。

それはどうかな

その声が聞こえた気がした。

## 過去の悲劇（後書き）

なるべく残酷を少なくしました。  
誤字・脱字があったらお知らせください。

## 悪との再会、そして戦い

『リイナ：もうあんなに大きく成長したのか：フハハ、これはおもしろい！11年ぶりに会いに行こうではないか！』

私達はあの日以来、平凡な日常をしていた。みんな楽しく過ごしていた。

会いに行こうではないか！

ふと、そんな声が聞こえてきた。

「っ！」

「あら？どうしたのリイナ？」

「…今、何か言った？」

「え？私は何も言っていないわよ？」

「そう…」

気のせい、最初はそう思った。でも、これからあの声が現実となることを私はまだ気付いていなかった。

『さて、確かこの辺りのはずなんだが…』

『彼』はもう近づいていた。

「ふわ〜もう夕方かあ〜」

私は夕食の買い物をしていた。空はもう夕方になっていた。

「早く帰らないとカイルとセフィーナに怒られちゃう…」

私はそう思い早歩きをした。

その時だった、私の目線の先に綺麗な青年がいた。

私はその顔に見覚えがあった。

(…まさか!?)

そう思っていると青年が私に気付いた。青年は私を見るとニヤツと笑った。

私は素早く後ろを向き走った。だがそれは無理だった。

「酷いな、せつかく会いに来たのに」

「会いに来なくていいです!大体こっちに来ても良かったの!?!」

「ああ、大丈夫だ、任せてきたしな」

後ろを振り返ると後ろに青年がいた。

「久しいな神人の姫君、会いたかったぞ」

「私は会いたくなかったわ魔王」

青年、魔王は笑った。

「リイナ、遅いわね」

「また道草してるんじゃないか？」

「んー」

3人は一向に帰ってこないリイナを心配していた。

「…俺、見てくる」

「頼んだぞカイル」

「…貴方と会うなんて何年ぶりかしらね」

「さあな…大きくなっただな神人の姫君」

「私は神人の姫君じゃないわ、ちゃんとリイナって名前があるの、お母さんとお父さんが付けてもらった名前が…」

「そうだな」

私と魔王は少し離れて向かい合っていた。

「神人の力は分かったか？」

「ええ…隠れて練習したわ」

「そうか…だったら戦っても大丈夫だな」

「…それ、本気で言ってるの？」

「ああ、本気だ、お前がどれくらい強いかわからないが、神人として戦え」

「いいわ…やってあげるわ、そのために結界を張ったのでしょ？人間に危害を加えないために」

魔王は私の言葉に笑った。

そして、戦いが始まった。

最初は魔王だった。

『闇に落ちれ、シャドウルート！』

(ツク！絶対勝たないと！)

『神の力、この世界において駆使する放て！ライトクレセリア！』

黒と光の力がぶつかり合った。その瞬間、結界に亀裂が入りそして結界がわれた。

パライイイイイイイイイン！

結界が割れると共に黒と光の力も弾かれた。

黒の光は空に弾かれ、光の力は

「！？カイル！危ない！」

カイルに目掛けて弾かれていた。

『神の力、美しき魂を守れ！』

何とか私の力で光の力はカイルに当たらなかつた。だが、カイルは少し吹き飛ばされていた。

「カイル！大丈夫！？」

「いったたた！」

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

「よかつた……」

私は安心したがすぐに魔王を睨んだ。

「何の為の結界なのよ！カイルが大怪我するところだつたじゃない！」

「そう怒るな、俺も予想外だつたんだ」

「なっ！予想外って！」

カイルは言い合っている2人を呆然と見ていることしかできなかった。

悪との再会、そして戦い（後書き）

今回は少し長い…と思います。

誤字、脱字があったらお知らせください。

## 予想外な展開

「何が予想外よ…」

私は怒っていた。大切な幼馴染が大怪我してしまうかもしれないというのに魔王は…

「…すまない」

「それだけで許せる訳ないでしょ!?!」

『大地に守りを』

私は結界を張った。後ろではカイルが驚いていた。

「おい、リイナ!」

「カイル、大丈夫だよ…すぐに終わるから」

本当はカイルに見てほしくなかったけど、もう仕方ない。

「やつと本気を出したか」

「ええ、魔王が私を怒らせてくれたおかげでね…今からはただの間ではなくて神人として戦うわ、神人の王　私のお母さんを討つた貴方に」

魔王は笑った。

「フツ、そうこないとな…来い、神人の姫よ!『悪の力よ我に従え』!」

魔王は黒の力で剣を作った。

『神の力よ我、神人において力を放て』

私も神人の力で剣を作った。

そして2人の剣が交差した。

## カイル視点

今、俺の目の前では戦いが行われていた。

1人は魔王と呼ばれていた。もう1人は、朝まで無邪気に笑っていた俺の大切な幼馴染。

幼馴染 リイナは戦っていた。アイツが戦っている？誰と？魔王と呼ばれている奴に？

あんなに弱いリイナが戦っている？

魔法を使つて？

確かにこの世界には魔術師が存在する。

でも、なぜ魔術師でも無く魔力も無いリイナが魔法を使っているんだ？

カイル視点 END

「はあああああああ！！」

がシャン！！

私の剣と魔王の剣がぶつかり合った。

私の体力は段々落ちていくが神人の力で回復していった。

私は人間の血があるけど神人の血もある。そういえばお母さんが言っていた。

『…ごめんねリイナ、まだあなたは2歳だというのに…私の血を濃く遺伝してしまった所為であなたにこんな怖い体験をさせてしまつて…』

濃く遺伝してしまった、と言っていた…だから私は神人の王であつ

たお母さんのおかげで神人の力がだせるのであるっ…

そんなことはどうでもいい、今やらないといけないのは目の前にいる魔王を倒す。

でも…もう疲れた…楽になって…いい、かな…

私の意識はそこで途切れた。誰かが私の名前を言ってるけど、もう疲れた…。

私が目を開けると知らない場所だった。すべてが白のまま…何も見えなかった。

リイナー

誰かが私の名前を呼んだ。

ーリイナー

「誰なの？」

リイナ、神人の姫君よ

「誰？」

神人の里へ来い

「神人の里？」

そうだ

「どこにあるの？」

それは、お前も知っているだろう

「私が知っている？私分らないよ？」

大丈夫だ

「ねえ、貴方は誰？どうして私の名前を知ってるの？」

お前は1回だけ、私に会っている

「え？」

ではなリイナよ、神人の里で待っておるぞ

その時私は見た。声の姿を。私は見たことがあった。あの人は…

「おじい…ちゃん？…」

そう、その人はリイナの母方の父、つまり神人の老王だった。

## 予想外な展開（後書き）

誤字、脱字があったらお知らせください。

## ルイロス家の秘密

私が目を開けるとカイルがいた。

「リイナ！」

カイルは大きな声で私の名前を言った…うるさいなあ。

「カイル、声大きい」

「あ、ごめん。でも目が覚めてよかった」

カイルは本当に安心したような顔だった。

「あれ？そういえば私…」

「本当に驚いたよ。戦っていたら急に倒れるんだから」

（戦い？…そうだ！私は魔王と戦っていたんだっ！）

「魔王は？」

「ここにいる」

横を見ると魔王がいた。

自分の下を見るとベンチだった。どうやら公園のベンチに寝かされていたようだ。た。

そんな事より私は夢に出てきた声の主、私のおじいちゃんの事を思い出していた。

「どうしたんだリイナ、まだ具合が悪いのか？」

「ううん、大丈夫だよカイル、心配してくれてありがとう」

心配そうな顔のカイルに私は笑った。そして魔王を見た。

「魔王、貴方に問うわ、神人の里を知ってる？」

「ああ、知っている」

「では神人の里の場所は分かる？」

「知っているが…よく覚えていない。なぜその質問をした」

私は夢に出てきたことをすべて話した。途中私はカイルの手を握った。カイルは驚いていたが握りかえしてくれた。

「お主の祖父…きつと神人の老王ウヰヂウであろうな」

「老王？」

「神人の王の上に老王がいると聞いたことがある、きつとそうだろう」

静かになった。だがカイルがその静かさを破った。

「リイナ、さつきから話している『神人』とは何なんだ？」

私はその質問に苦笑いをすることしかできなかった。そのため質問の答えは魔王が言ってくれた。

「神人は人間であつて人間でない。神に近い存在だ、そのため普通の人間より少し違う」

魔王の言葉にカイルは下を向いて何か考えていた。

（カイル？）

「神人と人間の違いは、身体能力、魔力簡単に言えばそれくらいだな、他にも普通の人間より違うところが沢山あるな」

魔王の説明が終わり、カイルは顔を上げた。だが、様子が変わった。

「カイル？」

カイルは私を見た。

「…小さい頃、村の奥に碑石があつた。そこには…」

カイルが言葉を切った。カイルの顔は少し悲しい顔だった。

「そこには、こう書かれてあつたんだ『神人の村、滅ぶであろう。しかし、神人の村は神人の里となつて復活するであろう。』」

ルドルフ・ルイロス

「え！？ルイロス！？」

カイルは頷いた。

「そして僕の家々に代々伝わる物それがこれ」

そう言つてカイルが出した物は小さな刀だった。

「！？…それは神人の先代王弟が持っていた刀！…そうか、お主は弟王の子孫だつたのか」

「そうなると思う」

「ふえ〜私は兄王の先祖になるの？」

「お主はそうなると思うぞ」

「じゃあ、カイルとは凄く遠い親戚になるんだね〜」

私の言葉にカイルは少し驚いていたがすぐに納得したらしい…なん  
で？

「…カイル、驚かないの？」

「ん？ああ、実はレイナの母親が神人の王だつてことは分かつてい  
たんだ」

「そうだつたんだ〜さすがカイル！頭良い！！」

そう言つて私はカイルに抱きついた。カイルは少し嫌そうだったが  
口には出さなかった。さすがカイル！！

「兄さんも知っているけど、セフィーナは知らないだろうな」

「セフィーナにも話さないかね…」

あれから、私とカイルは家に帰つてリクトさんとセフィーナに全て  
を話した。

セフィーナは最初は驚いていたが最後まで話を聞いていた。

「それで私、神人の里へ行つておじいちゃんと話してみたいの。夢  
の中でも待つてる、つて言っていたから」

「そうね〜私も行ってみたいわ神人の里へ」

「んじゃみんなで行きますか！これでも俺も弟王の子孫だしね」

そして私達は神人の里へ行く事にした。魔王も途中まで一緒に来てくれるらしい。少し心配だけど神人の里へ行こう。  
そう私は誓った。

## ルイロス家の秘密（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

**お鞆ちゃんとの再会（前書き）**

少し長めです。

## お爺ちゃんとの再会

「…暗い森って怖いね」

そう言いながら怖くない様子のリイナにセフィーナが青ざめた。

「…なんでそんなに余裕なのよ、私今すごくビクビクしてるのよ！？」

「ん？大丈夫だよセフィーナ、だって側にはリクトさんとカイルがいるしね」

「我もいるのだが」

魔王の言葉にリイナの様子が変わった。いきなり様子が変わったりイナにセフィーナは息を呑んだ。

「魔王：貴方どこまで付いていく気なの？セフィーナ達に手を出したら許さないわよ？」

「承知している…それに目的地が近くなったら我は魔界に戻るつもりだ」

リイナは呆れた。

「魔界城をほつたらかして居るのでしよう？今から帰ったら？」

「いや、城の方はどうにかなっている」

リイナは溜息をした。

私達は神人の里へ向かっている。神人の里はすごく山奥にあるらしい、最初は不安だった…でもみんながいる、それにお爺ちゃんとも会いたい。だからがんばるんだ！

そして1週間がたった、私達は大きな森にいた。私達が森の入り口に立っていると魔王が言った。

「この森はすぐに抜けられる、そして抜けたところが神人の里だ。そしてもう我は魔界に帰るとするでわな」

「魔王、またね」

魔王は移動魔法で魔界に帰っていった。

「さてみんな、行こうか」

リクトさんが先に行く。

「もう少しだ」

「ええ、リイナ、行きましょう！」

そして私達も歩いた。

魔王の言うとおり、森はすぐに抜けられた。

「おい、お前達」

「僕達の事ですか？」

「お前達の意外にだれがいる」

私達に声を掛けて来た人を見てみた。

（あ、この人も神人だ）

同じ神人だから分かる、魔力が普通の人間とは違った。

「お前達、この先に何かがあるのか知っているのか」

「神人の里」

私は即座に答えた。相手は驚いた顔をしていた。そもそもここに来る人はいないからね。

「…神人の里へ何をしに来た」

「私はお爺ちゃん…老王に会いに来たの」

老王という言葉にさつきよりすごく驚いていた。そして何か言おうと口を開いたとき…

「彼女は老王の孫だ、老王にもそう言えば分かるはずだ」

そしてこれ。と言ってカイルが代々伝わる刀を出した。

「!?!?それは先代弟王が持っていた刀!」

「そうよ、彼は先代弟王の子孫なの…私達は老王である祖父に会いに来たの、神人の里に入っつていいかしら?」

何やら考えている…そんなに迷うかしら?それでも私は王の娘なのよ?

「…私としてはいいですが、通行許可を取っておきますのでみなさんはここでまっつていてください。直ぐに戻りますので  
そう言っつて去っつていった。」

「さすがに簡単には通らせてもらえないね」

「さすがは神人の里っつて感じね」

私もそう思っつた。神人はあまり目立っつてはいけなからこうやっつて山奥にひっつそりと暮らしているのだ。

15分が経っつて誰かが来た。遠くから見てさっつきの神人では無かつた。でもその人物には見覚えがあっつた。そしてその人は私達に向かっつて手を振っつている。

(も、もしかして…)

「お爺ちゃん？」

「そつだ、お爺ちゃんだよリイナ」

老王、お爺ちゃんに私は抱きついた。

「お爺ちゃん！会いたかったよー！」

「我もじゃよリイナ、大きくなつたな」

2人で抱き合っていると後ろから声が聞こえた。

「老王に孫がいるなんて本当だったのですね」

その言葉にお爺ちゃんは振り向いた。

「だからいると言ったではないか、彼女は我の娘が村を出て行ってまで人間を愛して生んだ子だぞ」

「…お爺ちゃん、ごめんなさい…私の所為でお母さんを…人間であるお父さんや村の皆まで死なせてしまった」

お爺ちゃんは私の頭を撫でてくれた。

「謝らなくてもいいんだよリイナ、お前の所為でもない。…でもルイロスを連れていかせてよかった」

「…老王、僕達も父と母を守りきれませんでした…」

リクトさんの言葉にお爺ちゃんは首を横に振った。

「いや、お主たち兄弟もようやってくれた…これほど立派に育ってくれたならあやつらも安心しているだろう。リイナも守ってくれた、2人には感謝している」

「お爺ちゃん、セフィーナもずっと私の傍に居てくれたんだよ？」

「そつかそつか、セフィーナ殿にも感謝しておるぞ」

「いえ、私は大好きなリイナの傍に居ることしかできませんでしたから」

セフィーナはああ言っているけど私にとっては傍に居てくれてうれしかった。いつも怖いときは手を握ってくれた。悲しかったときは一緒に泣いた。私は本当にセフィーナが居てくれたうれしかった。

「さて、お城の方に行きますかな」

そう言ってお爺ちゃんは私の手を握って歩いた。皆も後ろから着い

て  
い  
っ  
た。

## お爺ちゃんとの再会（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

**驚きの真実（前書き）**

おそくなつてすみません。

## 驚きの真実

「うわあ！大きいお城！！」

「そうじゃろ？」

私達は神人の里のお城の前にいる。

あれから私は、歩きながら今までのことをお爺ちゃんに話した。お爺ちゃんは私が話し終わると頭を撫でてくれた。

「おかえりなさいませ、老王様」

「ああ、ただいまレル」

私達が中へ入ると1人の男の人が立っていた。名前はレルさんと言  
うらしい。

レルさんは私と目が会うと少し驚いてそれから優雅にお辞儀をした。  
「遠い場所からようこそいらっしやいました：皆様、本当に似てい  
らっしやる」

「似ている？」

「はい、皆様：四人とも似ていらっしやいます」

「四人？」

3人は分かる、私にカイル、リクトさんがいるから：でも4人だと  
いうことはセフィーナも入る。

「まずは部屋に行こうかの」

そう言ってお爺ちゃんは歩き出した。レルさんと私達も後に続いた。

私達はある部屋に入った。その部屋はお爺ちゃんの部屋らしい。そして私達は椅子に座った。

「…あの、さっきの4人とはどういう意味なんですか？」

リクトさんが質問をした。

「それはだな…」

お爺ちゃんはそう言って、セフィーナを見た。セフィーナも少し驚いていた。

「それはだな…セフィーナ殿、お主はな神人の血もあるのだ」

その言葉に皆が驚いた。

「セフィーナ殿の先祖は遙か昔、先代神人の王専属侍女なのじゃ」

「王専属侍女？」

「そうじゃ、名をレイアと言う。レイアは先代王兄の専属侍女だったのじゃよ…そして侍女を止め、人間の村へ住んだのじゃ…きつとそこで人間と結婚し子を産んだのだろう」

私がセフィーナを見るとセフィーナはすごく驚いた顔をしていた。

「わ、私に神人の血が…」

「…だからセフィーナの魔力は少し強かったのか」

リクトさんが言ってカイルが頷いていた。

（そっか、リクトさんとカイルは私やセフィーナと違って純潔の神人なんだ…だから私よりも綺麗なんだ）

「…リイナ？大丈夫？」

「え？あ、うん大丈夫だよ…やっぱり優しいカイルは大好き!!」

「ちょ！？わ！リイナ！」

私は思いつきりカイルに抱きついた。リクトさんが苦笑いをしながら私達を見ていた。

「ふお、ふお仲が良いのだな」

セフィーナは今だ驚きのあまり現実に戻ってこなかった。

## 驚きの真実（後書き）

お久しぶりでございます。

期末テストが終わり、テストが返され、やっとのことで絶望から抜け出してきました。

誤字・脱字があったらすぐお知らせください。

では、また次回お会いしましょう。

## 選択

お爺ちゃんが私を真剣な表情で見た。

「リイナ、神人の王になつてほしい」

「え？」

（今…なんて言ったの…）

私はお爺ちゃんという言葉が理解できなかった。

「王？」

お爺ちゃんは頷いた。

「そうじゃ、リイナ…お主は母は神人の王であつた。だからお前に王を引き継いで欲しい。今まで王無しで我らががんばってきた…だが我の力はもう無い、そこでお主に引き継いでもらいたいのだ」  
私が黙っているのとレルさんが口の開いた。

「リイナ様、我々は神人でも寿命があります。人間よりも長く生きることばできてもいつかは死が訪れるのです。」

「そうだ…我の寿命もあまりない…だからお主に継いでもらいたいのだ、いや、継がなければならぬのだ」

（どうすれば…どうすればいいの？…お母さん…）

「まあ無理にとは言わん、ゆっくり考えて欲しい…お主たちの部屋はもう準備してあるからゆっくりすりすごすといいいい」

私達はそれから部屋を出て、準備してもらつた部屋に入った。

「王…か…どうすればいいんだろう…」

「ゆっくり考える」

カイルは私の頭を撫でてくれた。カイルの撫でる手が私を安心させてくれた。

「カイルは、もし私が王になったらどうするの？」

「さあな、でも……」

カイルは刀を出した。

「この刀の兄さんじゃなくて僕に持たせていただいたんだ……リイナを守る力になりたい」

「カイル……」

私の頬に涙が伝った。

「リイナ、僕は君の事が……好きだ」

「……私もだよ、私も大好きだよカイル!!」

私はカイルに抱きついた。

「カイル、私……王になるわ……だからずっと傍にいて？」

「ああ、もちろんさ」

「……おめでとう(いざいます)(じゃー!)(……)」

「セフィーナ、リクトさん、お爺ちゃんとレルさん!？」

「聞いていたのか……」

扉の前には4人がいた。

「リイナ、王になることを選んだか」

「うん。私……大変だろうけど、お母さんが愛した神人の里を守りたい!」

「その勢いじゃ」

セフィーナのリクトさんが前に来た。

「おめでとうリイナ! 私達も安心したわ」

「うんうん、カイルも男になったしね」

「……」

カイルは少し頬を赤くしながら黙った。

「これで私達も安心してラブラブできるわねカイル」

「あははは、そうだね」

（（付き合っていた（んだ）（のか）…）（

「リイナ様、私もお力になりますのでがんばってください」

「ありがとうございますレルさん」

「カイルよ、リイナをよろしく頼むぞ」

「はい！」

お爺ちゃんは若いの、と言いながら笑っていた。

選択（後書き）

後1話で最終話かも

## 新たな始まり

あれから数月が経った。

私は王の冠式を行い神人の王となった。

カイルは次王として私の横に立つことになった。

カイルさんは側近として私達を支えてくれている。

セフィーナは私専属の侍女になった。毎日見ていると大変そうだったが本人は「こんなの楽勝よ!」と言っていてすごく楽しそうだった。おかげで短い日で副侍女官庁に任命された…すごすぎる…。

老王であるお爺ちゃんも離宮で老王妃のお婆ちゃんと暮らしている。たまに2人で会いに来てくれる。

「んー!終わった〜!!」

「ふう、おつかれリイナ」

そう言っただけカイルは私の頭を撫でてくれた。

「ん〜カイルが撫でてくれると気持ちいい〜」

「それはありがとう」

…そして毎日見るカイルの美顔の笑顔はサイコーです…!

こうして私達の新たな物語がスタートした。

新たな始まり…これからが楽しみです！！

## 新たな始まり（後書き）

これにて物語は終わりです。  
みなさん、ありがとうございました。

## あとがき

みなさん、森崎優嘉です。

『過去に囚われた私』はどうだったでしょうか？

小説を書くことが初めてだったので色々大変だった所もあったと思います。

『過去に囚われた私』は2作品目なのに関わらず1作品目よりもはやく完結…そこはふれないようにしましょう。

主人公のリイナは元気が取り柄の女の子です。過去にあんな悲劇があるのにそんなのどうでもいい！！という感じですが。作品名と違いますがそこはそこで…なにせ初めてなもので…

皆様、『過去に囚われた私』を最後まで読んでくださってありがとうございました。

『魔法学校エルセント学園の不思議姫』はまだ続く予定でございます。こちらでは今後ともよろしく願います。

最後になりますが、次の小説を書こうと思います。題名は『姫と破壊神』です。

恋愛ファンタジーになる予定です。

実はもうあらすじ、キャラクターなどは決まっています。あとは物語を書くだけなのです。

この『姫と破壊神』は私の親友と友人を元にして作っています。

実際、姫は私の親友。そして破壊神は親友に告白した男子なのです。その他のヒロインたちも私の親友、友人、そして友人の好きな男子を元にしたヒロイン達が出てきます。そしてそのヒロイン達の中に

自分を元にしたキャラも…

さてこれにて終わりにしたいと思います。

皆様、読んでくださり本当にありがとうございました。今後も『魔法学校エルセント学園の不思議姫』、それから書きます『姫と破壊神』をどうぞよろしくお願いします。

2011年

9月 27日 11時 森崎優嘉

## あとがき（後書き）

長々お付き合いしていただきありがとうございますとついでにまた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9915u/>

---

過去に囚われた私

2011年10月2日14時00分発行